

意欲に満ち、自分の思いを言葉で伝え合える児童の育成

～国語科「書くこと」の研究を通して、そのシステムを考える～

『教師のチャレンジ・児童のチャレンジ・家庭もチャレンジ』

与謝野町立三河内小学校

全国学力・学習状況調査の結果における特徴

国語・算数ともに、A、B問題の両方で全国平均正答率を上回った。国語においては、全ての領域、問題類型で全国平均正答率を上回った。特に、国語B問題において、全ての問題で全国平均正答率を上回ったこと、全ての記述問題で無解答率が0%であったことから、学習意欲も含めた学力課題が改善傾向にあると捉えられる。算数においてもA、B問題の両方で「数と計算」「量と測定」「数量関係」が全国平均正答率を上回ったこと、またB問題の無解答率の低さから、研究効果の算数科への波及が数値として表れた。

全国学力・学習状況調査の結果に寄与したと考えられる取組

授業における取組

～3つのチャレンジのうち『教師のチャレンジ』～

1 どの児童も「書ける」授業 ～授業改善の工夫～

(1) どの児童も参加できる導入の工夫

どの児童も意欲が高まり、何をするのか見通しがもて、「できそう」と思えることが、主体的な学びにつながる。そのため、生活経験や興味・関心が異なる児童が同じスタートラインに立てる工夫やねらいに迫る導入の工夫をしている。

(2) どの児童も自分の考えをもって進んでいけるスモールステップの工夫

どの児童も目標が達成できることを目指し、児童の実態に合った、ねらいにつながるスモールステップを工夫する。(例:「モデルを示す」「クイズ形式」「選ぶ活動」「ペア交流」「グループ交流」「付箋の活用」「ポイント練習」等)

(3) 相互評価による高め合う場の工夫

見る視点を明確にし、実態に合った「相互評価」を工夫することで書く内容が充実する。この活動が、「学び合う喜び」にもつながっている。

2 どの児童も「書ける」授業をつくるために ～評価研究の工夫～

(1) 「三河内式バリューマーク」の作成とその活用

授業改善のためには、教師が「何を・どのように・どこまで書かせるのか」という明確なゴールをイメージできていることが重要だと考え、『三河内式バリューマーク』と名付けた児童作品(児童が書いたもの)の評価基準を作成している。評価することが目的ではなく、指導前に目指すものを明確にし、指導の手立てを工夫することが重要であり、これを活用しグループで評価や指導の振り返りを行うことで、一人一人の授業力向上にも役立っている。

(2) 「三河内式ノート15ポイント」の作成とその活用

書くことの基礎・基本として、ノート指導を大切にしている。15ポイントを設定し、教師も児童も具体的な項目について意識することで効果が表れ、「みごっこノート展」により意欲に満ち、自信にもつながっている様子が見られる。

3 学力向上に向けた教職員研修の工夫 ～授業力向上のための手立て～

(1) どの教師も主体的に参加できる授業研究会の工夫

「グループによる事前研究会」「KJ法による事後研究会」「バリューマークを活用した評価会」「『自己化シート』による自己目標の設定と効果の検証」等により、どの教師も主体的に生き生きと授業研究に向かっている。

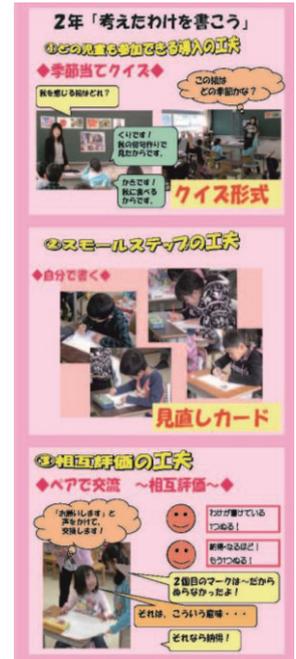
(2) 授業力を向上させる全国学力・学習状況調査の活用

各種テストにおける「解く会」「採点会」「分析会」「グループ別交流会」「自己目標表明会」を全教職員で行うことで、共通理解だけにとどまらず、次への主体的な指導改善へとつながっている。

(3) 3つのアンケートによる合意形成と確実な実践を目指した効果の検証システム

- ・「指導事項25項目」…共通確認したことを指導・実践したかどうかの振り返り
- ・「どの児童にもできてほしい20ポイント」…指導後の児童の姿から効果の検証
- ・「学習に関する児童アンケート」…児童自身がどう感じているかによる検証

この3つの検証を毎学期行い、グラフ化しながら次の方策を立てることの継続が、組織的な実践力を高める。



【2年】三河内式バリューマーク

1. 児童が「何を・どのように・どこまで書かせるのか」という明確なゴールをイメージできていることが重要だと考え、『三河内式バリューマーク』と名付けた児童作品(児童が書いたもの)の評価基準を作成している。

項目	1点	2点	3点
書き出し	書き出しが不明確である。	書き出しが明確である。	書き出しが明確で、内容が充実している。
内容	内容が不明確である。	内容が明確である。	内容が明確で、内容が充実している。
まとめ	まとめが不明確である。	まとめが明確である。	まとめが明確で、内容が充実している。
その他	その他が不明確である。	その他が明確である。	その他が明確で、内容が充実している。

△(1点以上) △(2点以上) △(3点以上)

「三河内式バリューマーク」

「どの児童にもできてほしい20ポイント」

項目	達成状況
1. 読み聞かせが上手である。	
2. 読書が大好きである。	
3. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
4. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
5. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
6. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
7. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
8. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
9. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
10. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
11. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
12. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
13. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
14. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
15. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
16. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
17. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
18. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
19. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	
20. 読書が大好きで、読書の楽しさを人に伝える。	

「どの児童にもできてほしい20ポイント」

授業以外の取組

1 学力向上システムの工夫点 ～どの児童にも確かな学力を身に付けさせることを目指して～

(1) スキルタイム（5校時開始前15分間）の取組

2週間サイクルで算数・国語の課題克服。まず「まとめテスト」を作成し、具体的な目標を設定する。どの児童も目標を達成するための練習プリントを自作し、より課題を焦点化した回復指導を行う。さらに、まとめテストの分析を毎回校内研修会で交流し、学級・個の課題を可視化することで効果が上がっている。

(2) がんばりタイム（毎週金曜日放課後）の取組

上記まとめテストによって学級・個の課題を明確にし、複数体制で課題を共有した上で回復指導を行う。

(3) 年度末の復習テストの取組

独自の復習テストを年度末に2回実施する。1月は実態把握、2月末は効果の検証として行い、さらに3月に学習補習を設定している。結果を生かしたきめ細かなスモールステップにより、学力の底上げを図る。

2 チャレンジのシステム ～意欲に満ち、挑戦する子どもを目指して～『児童のチャレンジ』

(1) 「やってみよう」という気持ちを大切にしたい8つのチャレンジ

「チャレンジする楽しさ（挑戦する力）」「夢をもつ（展望する力）」「学び合う喜び（つながる力）」を育む。



(2) 『三河内小ちゃれんじゃあず』の結成とその任務

上記8つのチャレンジについて、教職員で『ちゃれんじゃあず』を結成し啓発している。教職員もチームを組み、主体的に楽しく取組を仕掛けることで、より効果的なチャレンジのシステムが構築できている。教職員一人一人が主体的であることの教育効果は大きい。

3 家庭との連携のシステム ～主体的な家庭の働きかけを目指して～『家庭もチャレンジ』

(1) 「主体的な家庭の働きかけ」を目指した、家庭のチャレンジ



(2) 研究推進だよりの活用

学力の状況、授業、児童や家庭のチャレンジの様子等をタイムリーに伝えてきたことが、保護者・地域の理解につながり、また横のつながりの形成にも効果的であった。

4 取組を振り返って ～教師の変容、児童の変容、家庭の変容～

「人と関わって楽しい」という経験を積む中で、児童は自己実現を果たし、自己有用感、自尊感情を高める。そのような研究を通して、児童が「包み込まれているという感覚」をもてたことが大きな変容である。それにはまず、『教師のチャレンジ』が大切であり、合意形成を大切にし、きめ細かに具体的な事柄を継続してきたことが、各種学力テストやアンケートの結果に成果として表れてきた。研究発表会で「学校全体から学習意欲を感じる」「とてもあたたかい雰囲気」という感想をいただいた。「つながり、信頼関係、あたたかさ」を大切に、今後も「学力向上システム」の継続と波及に努めたい。

